

Title	牧野久実君提出博士学位請求論文審査報告
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	2006
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.75, No.1 (2006. 6) ,p.156- 160
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20060600-0156

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

牧野久実君提出博士学位請求論文審査報告

論文題名 琵琶湖の伝統的木造船の変容 — 丸子船を中心に —

論文要旨

牧野久実君提出の博士学位請求論文「琵琶湖の伝統的木造船の変容 — 丸子船を中心に —」の内容は、以下のように序章と終章を含め、合計六つの章からなり、総ページ数は二四六である。

序章 研究目的と方法

第一章 琵琶湖における和船利用の背景

第一節 琵琶湖における伝統的木造船の種類と分布

第二節 琵琶湖の形成過程と水運

第三節 琵琶湖の水運史

第四節 小括

第二章 丸子船の復元製作と関連事業

第一節 丸子船復元の目的と事業の経緯

第二節 琵琶湖の和船作りの道具

第三節 歴史民俗研究と地域住民

第四節 小括

第三章 琵琶湖の伝統的木造船の消長

第一節 伝統的木造船の消長 — 船大工のライフヒストリーより

第二節 丸子船の艘数と用途

第三節 和船が多用された背景と衰退の要因

第四節 小括

第四章 丸子船の機能と構造に関する諸問題

第一節 丸子船の横断面に見られる和船の原型要素について

第二節 横断面に見られる双胴船の構造

第三節 船先の形状に基づく丸子船の機能の変遷

第四節 小括

終章

第一節 要約

第二節 まとめ

第三節 今後の課題

本研究は、琵琶湖における伝統的木造船を通して、伝統文化、特に物質文化の変容の過程とその背景を明らかにしようとしたものである。琵琶湖に独特の丸子船をはじめとする木造船は、近代化の波が押し寄せる二〇世紀前半に大きな変革を迎えた。すなわち、今から半世紀ほど前まで、琵琶湖には数多くの木造船が行きかっていたが、新しい交通網や交通手段の発達によつ

て、これらの和船は次第にその姿を消していったと考えられている。牧野君は、古くはこの琵琶湖によって日本の東西そして南北が結ばれるとまでに位置づけられていたものが、今日ではかつてのような交通の「大動脈」ではなくなってしまった過程が、豊富な民俗学的資料や行政資料を含む文献史料等に基づいて、追求し得る点に着目した。琵琶湖とその集水域における和船の形態、種類、数の実態や変遷とその背景を追うことによつて、日本の近代化の過程における人と自然環境との関わりあい、すなわち両者の相互関係を考察しようとしたものである。

第一章の「琵琶湖における和船利用の背景」では、本論を展開するための基本的な文献情報を集め、整理している。まず、近代化以前の和船の数量、種類などに関するデータを、琵琶湖を取り巻く各行政区画(郡)毎に示し、輸送用、農耕用などの用途別の利用方法など、近江全体での傾向を導き出した。

次に、琵琶湖が地学的には地殻変動によつて出来た窪地が湖となった、いわゆる構造湖であることを示している。このことによつて、周辺には地溝帯や山地の複雑な地形が形成され、そして大小多くの河川が流れ込んでいる。これらの川筋が人と物とが行きかう要路となった点、およびこうした地形や気候に起因して、複雑な風と水流が生じるため、それに適応した航海術と船の構造が発達した点を示している。

次には、このような条件下で発達した琵琶湖の水運に関する以下のような歴史が述べられている。まず、考古学的には縄文時代後期の丸木船が発見されており、船はこの頃から既にこの

地域における人々の日常生活に密着したものであった。そして、弥生時代には水田稲作の開始にも関連し、ますます船が重要性を増していき、金属の利用による準構造船も用いられるようになる。古墳時代以降には、国家体制が整備され社会が複雑化するのに伴い、水運が日常生活以上に大きな意味を持つようになっていき、それが後の琵琶湖における船の性格を特徴づけることになった。

そのような歴史の中で、琵琶湖の木造船の利用と発達が意味づけられている。しかし一九世紀末、琵琶湖周辺における鉄道の開通などを契機として湖上輸送は衰退しはじめて丸子船も消え去っていき、現在では観光船という形でのみ船が生き残っている、という大きな流れが述べられている。

つづく第二章「丸子船の復元作業と関連事業」は、牧野君が本研究を始めるきっかけとなった丸子船の復元という、滋賀県立琵琶湖博物館(平成三年当時は準備室)の二年半にもおよぶ大きな事業の内容と経過の詳細な報告である。この事業の主たる目的は、琵琶湖と人の関係を探るといふ、環境展示をテーマとする博物館が、琵琶湖にしかない丸子船を伝統的技術によつて新たに復元して、展示物を作るためのものであった。昭和の初期までは、琵琶湖に丸子船は数多く存在していたにもかかわらず、その利用の実態や建造技術に関する研究はほとんどなかったという状況を踏まえ、この博物館に勤務する同君は、その伝統的技術による復元作業をこと細かに記録し、消え去りかけていた丸子船建造技法の継承のデータとしたものである。

この章の記載は、伝統的な建造技術を今も記憶しており、当時の道具類や共同作業者が確保できる船大工を探しだすことから始まった、という。そして、その記述は、木材の切り出し、製材、板取、組み立て、仕上げの全工程から、これも伝統に則って行われた進水式までに及ぶ。近代化の波の中で、急速に失われかけていた製造方法や技術が、製作工程ごとに詳細かつ正確に述べられている。また、この丸子船の建造に用いられる道具類についても、各工程別に写真、名称とともにそのすべてが記載され、昭和初期までの造船技術を、複合的に再現する貴重な記録となっている。

次には、この丸子船復元作業と展示を契機として行われた、琵琶湖博物館と周辺地域住民との間での双方向的な情報の交換について述べられている。いったんは人々の記憶から完全に消えかけていた和船に関するさまざまな情報とともに、琵琶湖周辺におけるかつての交通・生業の状況が、多くの地域住民によっても描き出されたことが、復元・展示活動の歴史民俗学的成果の一つとして、評価されている。

第三章「琵琶湖の伝統的木造船の消長」では、主に丸子船をはじめとする木造船の衰退とその背景について、日本の近代化との関係から考察されている。主な材料としたのは、明治以降の『滋賀県統計書』などの行政資料と、著者自らが行った多くの住民への丹念な聞き取りによる情報である。

その最初の仕事としては、丸子船の建造を手がけたことのある一人の船大工のライフヒストリーを追い、主にそれを基に琵琶

湖周辺における木造船の消長を明らかにした。これらによると、一口に木造船といっても、種類によって衰退の時期は異なっており、一九三〇年代から一九七〇年代にかけて、「丸子船」―「漁船」―「田舟」という順番に衰退していったことが示されている。つまり、一般にいわれるように一九世紀末の鉄道の開通が、丸子船をはじめとする木造船を裏舞台に追いやった原因の一つではあっても、鉄道開通後のかなり後まで丸子船が身近な輸送手段であり、他の木造船も一九六〇年代までは多用されていたことが、聞き取り調査の結果にも明確に示されている。

また、船の素材としての鉄鋼や強化プラスチックの導入や陸路の発達のみが木造船の消滅につながる原因ではないことも示され、むしろ、一九三〇年代前後における造船にかかわる専業集団の解体が、大型の材を必要とする丸子船の建造を困難にして消滅に結びついた点を明示している。さらに、漁船については、よりすばやく漁場にむかい魚群を追い求めるという機能が重視されるため、エンジンや新素材が船の機能を高めたことで、伝統的な木造船の形や素材が急激に失われていったことも明らかにされた。一方、農耕用として用いられ、特に速度の点で改善が求められることの少なかった田舟は、一九六〇年代に至るまで琵琶湖周辺の人々の身近な足として伝統的な姿のままで使用され続けたという事実も、興味深い結果として示されている。

第四章の「丸子船の機能と構造に関する諸問題」においては、主として琵琶湖博物館による丸子船の復元建造過程における観

察、および船大工等に対する直接の聞き取りによって得られた知見に基づき、その構造について考察し、問題点をまとめたものである。まず、和船の原型要素としての船体横断面の形状の検討から、丸子船は基本的には、横方向への発達が中心的に見られる一方、縦方向へも発達があり、二つの伝統が認められるとしている。

そして、丸子船の丸みを帯びた形態と、横断面に見られる「船体の深さに比べて横幅の広い」構造は、「オモギ」と「キシ」を用いて作り出された、この船に独特のものであるとする。そして、この特徴は内水域の浅瀬の多いところを航行しなくてはならない琵琶湖の丸子船を、喫水線を浅くして積載量を増すようにするための工夫であると解釈している。

また、水押しを立てた舳先と緩やかに彎曲した船底の特徴は、航行のスピードを増すためのものであると推定している。特に舳先にあるこの特徴は、一六世紀頃の歴史資料の絵図には認められず、当時のものはただ立て板をはぎ合わせただけの丸みを帯びたものであったことを指摘し、後の一八世紀から一九世紀にかけての時期に水押しをもつものに変化させたとする。船体への波の抵抗を最も大きく受ける舳先の形状は、船体の走行性と密接にかかわるため、速度と足回りのよさという機能の向上を目的とした構造上の変化と見る。

審査要旨

牧野久実君による本学位請求論文は、日本最大の淡水湖であ

る琵琶湖で使用された各種の木造船のうち、特に一九世紀から二〇世紀前半にかけて使われた「丸子船」に焦点をあて、おもに民族考古学的手法によって、その変容過程を明らかにしようとしたものである。研究資料には、考古学、歴史学、民族学、民俗学に関するものをはじめ、自ら実施した現地調査（実測・聞き取りなど）によって得られた独自の詳細な記録も多用し、多角的な視点に立った斬新な論文である。

ことに、同君が主任学芸員として勤務する滋賀県立琵琶湖博物館が行った、伝統的丸子船の復元事業の過程や船大工の技術の復元的記録もきわめて詳細かつ丁寧に記載し、これらを主眼である丸子船の変容、衰退過程の究明のための基礎資料として巧みに応用している。また、この事業をめぐる博物館ボランティア集団や入館者を介した情報交換などによって、歴史的資料としての丸子船を現代に位置づけた点は優れた成果といえる。

琵琶湖における丸子船をはじめとする木造船の消長に関しては、文献資料のみならず、伝統的技術を保持している一人の船大工のライフヒストリーを、この地域社会の歴史の中に復元し、それに行行政資料の統計的なデータを重ね合わせた手法は独創的であり、近代化の過程で木造船の利用が衰退し、ついには消滅して行く姿を新たな方向から探っている。これによって、木造船の衰退が、西廻り航路の開始、エンジンの取付け、鉄やグラスファイバーなどの新素材の登場、圃場整備などの一般的に論じられている理由だけではなく、その背後には木造船建造に不可欠な專業集団が、一九三〇年代に崩壊したという事実がその

大きな原因であったということを明示した点は、高い評価に値する。さらに、木造船の衰退はその種類によって時期が異なり、農耕用の「田舟」などは比較的近年まで使用され、また従来一九世紀とされていた丸子船の衰退のはじまる時期も、実はもつと時代が下るといふ分析結果もこの研究による新たな見解である。

また、船体の横断面など和船の原型要素の比較検討から、琵琶湖における丸子船の「船体の深さに対して横幅が大きい」という構造が、浅瀬の多い環境で積載量を確保しつつ航行するのに適したものであるとする指摘や、一八〜一九世紀頃に速度を上げるため以前とは異なる水押しを立てた舳先に変化させた、と見るなど構造上の特徴からの議論も新たな成果といえる。ただし、「船体の深さに対して横幅が大きい」という特徴を、双胴船（カタマラン）の構造との類似にすぐに結びつけて、丸子船が「双胴船的構造」をもっているためにバランスを保ちやすいとするような説明などに、力学、工学的検証が十分には伴っていない弱点も残っている。本研究が多方面の分野からのアプローチを特徴としているだけに、今後、かつてと同じ環境、条件下での船の航行実験なども含め、工学的な専門性を高めた検討を期待するところではある。

とはいえ、本研究は琵琶湖とその周辺という、かつての交通の要衝の地域における交通・運搬手段としての伝統的和船の変容を把握し、それを日本の近代化の中で解釈することに十分成功しているといえる。それは、船という物質文化に検討の主体

をおきながらも、変容の主たる要因は人とかかわりにあるという視座が明確に打ち出されていることによる。また、木造船が長い歴史のうちに、農耕、漁業、輸送などの実用面だけでなく、祭、葬送、子どもの遊びなどの精神的な面でも大きな意味を持つていたという意見は、本論での記述は多くないものの、今後のこの方面においても研究の展開が期待できるものである。

以上のような本論に対する評価により、著者牧野久実君は、博士（史学）の学位を授与するに値すると判断する。

論文審査担当者

主査	慶應義塾大学 文学部教授	阿部祥人
副査	慶應義塾大学 名誉教授	近森 正
副査	吹田市立博物館 館長	小山修三
学識確認	慶應義塾大学 文学部教授	阿部祥人